

# 学生によるまちづくり

## 「work-waku 都留」を訪問して

協  
同  
の  
こ  
ろ

青木未知（協同総合研究所）

「work-waku 都留」とは？

「work-waku 都留」とは、山梨県都留市にある都留文科大学社会科学部の「ワークショップ演習」から生まれた、まちづくりサークルです。授業を担当した甲斐哲郎先生が「自分の想い(エゴ)からスタートして周りが動き出す」ことをテーマに掲げ、授業の終わりにそれぞれが「都留をこんなまちにしたい」というアイデアを企画、それを実現するために2003年7月に誕生しました。現在は主に、コミュニティカフェ「hotori」の運営、アパート再生、公民館学級「わくわく学級」、という3つの分野で活動しています。

私達は9月11日、都留文科大学3年生の岩倉里珠<sup>さとみ</sup>さんに案内していただき、学生達の手によって創られたコミュニティカフェ「hotori」と、学生達の手によって再生されたアパート「つる小屋」を見学しました。「hotori」では、岩倉さん、本多尚子さん(3年生)、“環の拠点”オーナー志村裕一さん(51)、「つる小屋」では住居人の岩倉さん、佐々木寛章さん(4年生)、佐藤菜穂子さん(4年生)に話を伺いました。



外から見た「hotori」



「hotori」入り口

コミュニティカフェ「hotori」

「hotori」は国道139号沿いにありました。入り口には大きなクマのぬいぐるみが飾られ、中にはガラスのテーブルが3つ、ガラス張りの窓の外にはオープンテラス、そのすぐ横には小さな川が流れている、落ち着いたおしゃれな空間です。現在は土曜日の11:00～17:00のみのオープン。メニュー開発が

らカフェの内装、キッチンまで全て学生による手づくりです。メニューは毎月テーマと共に考案しています。8月のテーマは「楽園」、ランチメニューは、じゃがカレーピザ、ベグルサンド、ロコモコの3種類を用意、それにフルーツヨーグルトパフェ、フレッシュオレンジケーキいづれかのデザート、ドリンクがついて500～550円というお手ごろの価格です。現在人件費は出ていませんが、「企画から運営までできるという経験と地域の人とのふれ合いが楽しいので、アルバイトよりも価値があります」とカフェリーダーの本多さん(左写真)は言っていました。



hotori 本多さん

出ていませんが、「企画から運営までできるという経験と地域の人とのふれ合いが楽しいので、アルバイトよりも価値があります」とカフェリーダーの本多さん(左写真)は言っていました。

### 「hotori」の設立経緯

「work-waku 都留」メンバーは、市民に自分達のまちづくり案を見てもらおうと、2003年11月に「わくわくパーティー」を企画しました。最初は「本当にこれらの企画が実現するのか」と半信半疑な面もあったそうですが、予想外に市民の皆さんが多く集まり、反応が良かったことで自信がついたそうです。

「hotori」が運営されている場所は、地域における仕事づくりの複合店舗「環の拠点」です。オーナーの志村祐一さん(右写真)が今年の11月にオープンさせた、起業を支援するテナントハウスの第1号



環の拠点 志村さん

として、「hotori」がオープンしました。

「環の拠点」オーナーの志村さんは、甲斐先生の「ワークショップ演習」を聴講生として受講していました。志村さんは、かつては東京で大手小売・流通会社にて、新規店舗の開拓や閉店の計画を立てる部署に勤めていました。しかし在職中から、「既にある都留の資源(人・大学・自然等)に手を加えて都留に必要なものをビジネスとしてつくりたい」と、休みの日に大学の公開講座などを受け、その道を模索していたそうです。通勤に2時間以上かかる東京に勤務していたので普段は地域との交流はありませんでしたが、「都留で事業を始めるにしても地域との関係がなければできないので、いろいろな人たちとおつき合いしながら地域との関係を築いていきたい」と考えていました。そんな中、同じ大学の授業を受けた志村さんと学生の「地域の人々と交流できる場が欲しい」という思いが一致、志村さんは「有限会社 共創マーケット小さなおせわ」を2004年10月22日に設立し、2004年11月22日に「環の拠点」をオープンさせました。「hotori」も同日オープンです。

「共創マーケット小さなおせわ」は、初期費用が小さくても起業できるよう、場所(環の拠点)や事業設備、起業のノウハウを提供、その代わりに売り上げの一部を還元してもらうという事業です。しかし、事業を志村さんのノウハウの型に当てはめるのではなく、「共創マーケット小さなおせわ」という名前にもあるように、学生のやる気と詳細なプランがあるから事業に結びついたのであり、志村さんはあくまでもアドバイザーとしてのスタンスだそうです。「何より

も一番は学生のやる気、『自分たちでやりたい』という気持ちが圧倒的に強く、それがすごい原動力になっていて、魅力的に感じたんです」と志村さんは言います。「環の拠点」には他に「ぱそコネっとカフェ Iこっと」「整体院・食養手当ての店 和(なごみ)」が入っています。

## アパート再生計画



外から見た「つる小屋」



「つる小屋」共有スペース(写真「work-waku 都留」提供)

学生の手によって再生されたアパート「つる小屋」は2005年6月に完成しました。3階立ての2階部分が共有スペースで外見からは全く想像もできない空間となっています。コンクリートがむき出しになっていて、白くて大きな椅子とテーブルが真ん中に置かれています。壁一面に広がる白い本棚に



皆で作業できるようにと設計された広々としたキッチン(写真「work-waku 都留」提供)

は遊びにきた人が楽しめるようにと、たくさんの本・マンガや小物が置かれています。大勢の人が作業できるようにと設計された横一面に広がるキッチンがあり、奥には来客用の宿泊スペース、もともとなかったお風呂も設置しました。

2003年の甲斐先生の授業を受けた佐々木さんが中心となり、「ワンルームアパートに住んでいて隣の人の顔がわからない生活は寂しい。もっと皆と交流できるようなアパートに住みたい」「まちの人と一緒に暮らしたい」という想いと、「ワンルームアパートは一人一人のスペースが確保されていて環境問題を考えると非効率ではないか」と考え、共有スペースのある「コレクティブ住宅」をつくることを企画しました。「hotori」と同じく2003年11月の「わくわくパーティー」にて市民向けに提案を行ったところ、建築士さんなど賛同者が出たことで実行に踏み切りました。再生に選んだアパートは旧市街地にある築25年のもの。ここ2年はアパートの入居者は一人もいなかったそうです。そこで大家さんが「アパートに人が住んでくれるなら」と1年間家賃を無償で

貸してくれることになりました。2階の部屋を1部屋来客用に残して2部屋を解体、共有スペースとすることにしました。



左から、東京から来ていた一時滞在の大澤正吾さんと、「つる小屋」住居人の佐藤さん、岩倉さん、佐々木さん。奥に見えるのは来客用の部屋

作業は岩倉さんと佐々木さんが中心となり、建築家や美大生、地元の業者の手を借りながらの約2年ごしの完成となりました。先がなかなか見えない地道な作業で大変だったようですが、ペイント等皆でできる作業はイベント化して、情報を外に発信し、なんとか完成にこぎつけました。

アパートは現在3名が住んでいます。共有部分は地域の交流の場にしてもらいたいと、既に石鹸づくりやライブ等を行ったそうです。運営もしっかりしていて、冷蔵庫に缶ジュースが販売されていたり、共有スペースで飲み会を開くときには1人300円の場所代をとる等、決まりごとがあります。来客者は共有スペースの奥の部屋に一泊1,000円で泊まることができます。私たちが訪問したときには、東京の学生が1ヶ月滞在していました。

また、授業やら遊びやらで忙しい学生ですが、毎週月曜の朝ごはんは住居人で一緒に食べようと計画をしているそうです。ア

パートを使用する人だけではなく、周りに住むお年寄りとの交流もできるようになったとのことでした。

## 学生の大胆な行動に結びついた要因

学生たちをここまで大胆な行動へと導いたのは、まずは彼らの「やる気」が一番に挙げられますが、その他にはどのような要因があるのでしょうか。

### 1. 大学の授業

#### 1. 自分の想いを実践へ

都留文科大学の社会学科はフィールドワークが多く、実践的な学習ができる特徴があります。「work-waku 都留」が生まれた甲斐哲郎先生の授業は、「1.自分がどうしたいのかという自分のエゴから企画書を書き、2.そのエゴを複数の人が共有化するためにはどうすればいいのかを計画し、3.フィードバックが自分と他人の満足を満たし、1~3が完成するとさらに周りが動き出し完成度が増す」というものでした。その授業が学生たちを「まずは行動してみよう」と促したと言えます。また、「自分の想いをどう周りを巻き込みながら実践に活かすか」という方法を理論的に学んだのです。

#### 2. 社会に開かれた授業

甲斐先生の授業を、知人から評判を聞いた志村さんが受講していたことが、学生と志村さんを結びきっかけとなりました。その出会いがきっかけで、志村さんの小売業での経験が実際に社会へと働きかけた学生への道しるべとなったのです。逆に志村さんは学生たちの新しい発想によってつくら

れたコミュニティカフェ「hotori」を自ら運営する「環の拠点」に設け、ビジネスを展開するうえでの地域の人々との交流の場とすることができました。

また、学生たちはまちの人たちに企画案を発表するために「わくわくパーティー」を開いています。学生はまちの人たちへ自分達の声を発信し、逆にまちの人たちは良い反応をきちんと示したことで、学生に自信が付き、相乗効果をもたらしたということです。「アパート再生計画」では、まちの人々や建築士さんのよい反応に加え、設計図を作らないうちから作業にとりかかってしまうような、建築に関して何のノウハウももたない学生に任せた大家さんの好意があったからこそ、進んだ計画と言えます。「わくわく学級」は公民館の職員がパーティーに出席し、その企画を耳にした公民館の館長が学生側にアプローチしてことで話しが進みました。

## II. 地域的背景

このようなまちづくりを企画した理由を学生に聞くと、皆が口をそろえるのは「ワンルームアパートでの一人暮らしが寂しくて、もっと人と交流する生活がしたかった」とか、「まちが面白くなって休みごとに実家に帰っていた」ということです。その背景には、1. 周りに学生が楽しめるようなところがない、2. 日常で人との交流が少なかった、ということが挙げられます。

### 1. 周りに学生が楽しめるような繁華街がない

都留市は東京から約2時間かかるところに位置しています。「遊びに行く人は東京ま

でいくからお金がかかるし、逆に遊ばない人にとってはあまりお金を使わない環境(岩倉さん)」というように、都内の学生のように普段から気軽にショッピングなどを楽しむ環境ではありません。

## 2. 日常で地域の人との交流がない

### 2.1. 地域住民と学生の住む地域の乖離

都留市は山間部の約35,000人のまちにもかわらず市民の12人に1人が学生という「学園のまち」です。都留市は、臨時教員養成所の誘致や短期大学への移行は市民の力が大きく働きました。市民のボトムアップによって設立された大学という点では日本では希有な存在です(フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』)。都留市の市長の挨拶にも「未来を拓くりニアと学園のまち」と紹介があるように、昔から地域の人たちは学生を受け入れてきました。

しかし実際は、大学が市街地と離れている場所にあり、学生の80%以上が山梨県外出身で、ほとんどの学生が大学から2km以内に住んでいるので、旧市街地と学生の住む地域が分かれてしまっているのが現状です。今では大学のある地域のほうが活性化されていて、旧市街地の商店街は活気がなくなってしまったそうです。

### 2.2. ワンルーム型アパートの増加

大学が移転した1976年までは、大学は旧市街地にありました。その周辺には学生用のトイレやお風呂が共同のような下宿アパートが多く存在していました。アパート再生計画に協力した大家さんは、「多くが家族のように接してきた」と述べています

(2004.9.8 山梨日日新聞社)。しかし、大学が旧市街地から離れた地域に移転してしまったことと、ワンルーム型アパートの増加によって、下宿型アパートが残ってしまうようになりました。現在(2004年夏)では3,306室中ワンルーム型が2,683室、共同型が623室になっています(都留大生協「下宿問題」小委員会HP)。ワンルーム型だと一つの部屋で全てが完結してしまうので、小さなまちの大学にもかかわらず、何かきっかけがない限り隣のアパートの住人が誰だか分からない環境だそうです。また、不動産業者が仲介する形態が多くなり、アパートの管理者が誰だかもわからない状態になってしまいました。驚いたことに、都留市内の不動産業者は大学が移転したくらいの時期(1975年)には75事業所だったのが、2001年には171事業所まで増えています(都留市役所産業環境課 事業所企業統計調査)。

### 2-3. 地場産業の衰退

「環の拠点」オーナーの志村さんによると、都留の昔からの地場産業は織物でしたが、既に一部の業者を残して衰退し、現在は金属工業や機械工業、そして小売・卸関係が多いそうです。もともと自営業が多かったようですが、年々廃業して会社勤めが増えたとのこと。そのせいか、志村さんが朝から晩まで東京で働いていて地域の人との交流がなかったように、学生だけでなく、時代の流れで都留の住民同士でも一歩踏み込んだ近所づきあいが少なくなったと考えられます。志村さんは「こういう小さいまちでも東京と同じ現象が起きていますよ」と言っていました。

このように、大学のある地域と旧市街地が離れてしまったこと、ワンルーム型アパートの普及により学生同士・大家さんをはじめとする地域住民との交流がなくなったことに加え、住民同士も地域の産業が衰退しサラリーマン化が進むことで交流が少なくなったという地域的背景も相まって、高校を卒業して見知らぬ土地で暮らす学生にとって「人との交流を深めたい」という気持ちが高まったと考えられます。

### 3. 完結型の小さなまち

まちが小さいということは、学生とまちの住民の想いが一つになるのに良い条件となりました。

都留文科大学は、学生は約80%が県外から来るものの、ほとんどが大学の周りで4年間を過ごすために、その間は都留市の住民となります。大学は都留市が経営していて地域の人とのボトムアップで出来た歴史があるので、地域に根ざした大学と言えます。しかし、実際は日常から学生と地域の人との交流があるわけではありませんでした。けれども、「work-waku 都留」の学生が地域に働きかけたことで、都留の人々が手をつなぐことができました。「hotori」に食材を提供している小売業の人、お客さん、志村さん、公民館、「わくわく学級」を通じて知り合ったまちの人、「つる小屋」の建築を通じて知り合った人、大家さん、近所の人、お年寄りなどです。そして皆の共通点は、多くが都留に住んでいるということです。

加えて、その上での重要なポイントを志村さんは述べています。「やっぱりコンパクトにまとまっているまちですから密度は近

い関係ではあるんですよ、ただ近い関係というはお互いに一步踏み込まないとダメですね。いくらまちが小さくても、誰かが一步踏み込まなければ交流はうまくないということです。学生による「一步踏み込んだ行動」があったからこそ、地域と学生をつなぐ結果になりました。

### 今後の方向性

都留文科大学を卒業した学生は、多くが出身地に戻るか都心部に就職することになるそうです。コミュニティカフェ「hotori」にしても、再生したアパート「つる小屋」にしても、「わくわく学級」にしても、1～2年後には今のメンバーは卒業してしまうので、その前に次の代に引き継がなければなりません。

岩倉さんは、「『work-waku 都留』を立ち上げた初代の人々の想いを継続させる難しさを、2代目の私達でもう感じています」と言います。佐々木さんは、「このまま3つのプロジェクトが独立して完結してしまうのは寂しいので、卒業までに次に残る仕組みづくりをしたい」と言っています。ある企業へ申請したまちづくりの助成金は、2つ目のアパートを再生するよりもまず、また「何かしたい」という企画が出来たときに、今までのノウハウを活かしてどのように次につながるのか、その仕組みづくりを構築するための資金にしたいとのこと。現在の企画が落ち着いて余力がでてきたら、「work-waku 都留」という団体が再結集して、次の企画を目指していくような団体でありたいと話してくれました。

### この事例から学べること

学生の行動がまちづくりにつながったこの事例からは、多くの効果と要因を学ぶことができます。

#### 【地域にとっての効果】

- ・型にはめず学生の主体性(わくわくすること)によって生れたアイデア・行動はまちの人にとって魅力であった(若い世代からうまれる発想、外部から来た人が多い=まちを客観的に見ることからうまれる発想、それは失敗しながらも試行錯誤で物事を進められることによって育まれ、その環境は学生の主体性を尊重する地域の包容力があってからうまれた)
- ・「work-waku 都留」のつくった交流の場は、つくりあげる過程から地域の人を結びつけた(学生の一步踏み込んだ行動が地域の潤滑油・地域の接着剤となった) (小さな一步でも、まずは一步踏み出し、そとへ情報発信し、外部を巻き込んだので大きなものになった)
- ・自分たちで一からつくり(責任感)、まちの人の力を借りてつくったからこそ(連帯感)また、学生は流動的だからこそ、次に残る仕組みをつくらうという思いがうまれつつある(責任感・連帯感・学生の流動性が自己完結しない行動をうみだし、継続性につながる) 継続性については、今の段階ではっきりとは言えるわけではない。

#### 【学生(若者)にとっての効果】

- ・カフェ・アパート・公民館学級をつくらり運営する上で、いろいろな人と知り合い、社会の中で物事を進める方法を教えて

もらい、試行錯誤する中で将来を知る上での貴重な経験を得た（**責任を伴う社会経験 = 将来へのステップアップの原動力となる**）

- ・自分達にも地域の人々にとっても必要なものを一からつくりあげた経験は大きな自信となった（**一からつくりあげた計画を成し遂げた自信 = 将来へのステップアップの原動力となる**）
- ・何よりも、いきいきと活動していたのが印象的（**充実した学生生活**）

#### 【行動における要因】

- ・「同じまちに住んでいる」ということは、世代を超えて共有できる想いがあるということ（**地域への想いはあらゆる人が共有できる = 行動の原動力、ネットワークの促進、いろんな人が集まることで相乗効果をうみだす**）
- ・地方には、活用されていない店舗や土地、活性化を願う地域の人々の共通する思いがある（**地方にはまちづくりを行うチャンス・資源がある**）
- ・大学を都留市で運営していること、大学が住民のボトムアップでできた歴史により、住民の大学に対する想いや大学を受け入れる体制が昔からある（**住民・地域のかかわりが大きいものには住民に共通する愛着や想いがある = 連帯感**）
- ・「work-waku 都留」は3つの計画で動いているが、それぞれが補完し合っている（**分野の異なる計画でもひとつの団体を作って動くことで相乗効果がうまれる**）

今回取材した学生たちは、自分たちの想

いや感覚を、大学の授業で形にすることを理論的に学び、社会の中での具体的なつくりあげ方を、試行錯誤しながら地域の人やそれぞれの分野の専門家等に学びながら発展させていきした。皆いきいきと楽しそうに話をしていたのがとても印象的です。

自分たちの想いを胸に学生たちがつくりあげた、このような新しいものを、都留を地元とする若者をも巻き込みながらますます発展・継続させていければいいなあと思います。

図 「work-waku 都留」のおおまかな年表  
2003.4 ~ 2003.7

甲斐徹郎先生のワークショップ演習

2003.7

授業の中からそれぞれの企画案が誕生

2003.11

「Work-waku 都留」が街づくり案を市民に見てもらおうと「わくわくパーティー」を企画、プレゼン。市民に賛同者がでる

2004.5

公民館にて「わくわく学級」オープン

2004.11

「環の拠点」都留市にオープン

2004.11

「hotori」オープン

2005.6

「つる小屋」完成

#### 参考文献

- ・山口奈津子「『わくわくしたい』が『このまちが好きに』」、自治体研究社『住民と自治』507号
- ・work-waku 都留 2003年夏~2005年春 文集
- ・山梨日日新聞社「ときめきゾーン キャンパス」2004/7/7, 2004/9/8, 2005/1/12 版
- ・都留文科大学ホームページ  
(<http://www.tsuru.ac.jp/index.html>)
- ・都留市役所ホームページ  
(<http://www.city.tsuru.yamanashi.jp/>)
- ・都留文科大学生活協同組合「下宿問題」小委員会ホームページ  
(<http://www.tsuru.ac.jp/~seikyo/top.htm>)
- ・フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』  
(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)
- ・work-waku 都留ホームページ  
([http://www.geocities.jp/work\\_waku/](http://www.geocities.jp/work_waku/))